

小説の精読と映像化の試み

— 副読本 *After the Bomb : Brother in the Land and Wider Reading* の
考察を通して —

松岡礼子
(2017年10月4日受理)

Exploring the Idea for Close Reading and Visualization of the Novel Based on the Analysis of
the Booklet *After the Bomb : Brother in the Land and Wider Reading*

Reiko Matsuoka

Abstract: This paper explores the idea for close reading and visualization of the young adult novel “Brother in the Land” based on the analysis of the booklet *After the Bomb : Brother in the Land and Wider Reading* for Year 9 and GCSE courses published in 1990 from the English and Media Centre (EMC), London. The booklet offers several ideas for close reading and wider reading, taking “Brother in the Land” as a starting point. The topic, From Book to Screen, which suggests visualization of the beginning of the novel encourages students to do close reading of the film “Threads” as a text for comparative reading. It also reflects EMC’s basic concept for media education.

Key words: a real book, novel, close reading, wider reading, visualization
キーワード：現実にある本、長編小説、精読、ワイダー・リーディング、映像化

1. 研究の目的と方法

1990年にロンドンの the English and Media Centre (中等国語科教育センター, 以下 EMC) (注1) が第9学年 (13-14歳) および第10・11学年 (14-16歳 / GCSE 学年) 用に編集・刊行した副読本に, *After the Bomb : Brother in the Land and Wider Reading* (「核戦争を扱った小説作品のよみ」) (注2) がある。

副読本は, 現代イギリス児童文学を代表する作家 Robert Swindells の代表作 *Brother in the Land* (邦訳「弟を地に埋めて」) (注3) を起点としたワイダー・リーディング (注4) の学習指導を全22の単元学習として構想し, 22のワークシートに具体化したものである。拙稿 (1999) では, 小説「弟を地に埋めて」の基本的精読法をとりあげた前半の12単元と, 量質ともに広範な読みの具体を示したワイダー・リーディングを中心とする後半の10単元の具体を考察し, 次の特徴的

な教材観を指摘した。すなわち, a real book (現実にある本) (注5) のまるごと一冊の教材化, 伝統的な英文学への目配りと現代児童文学の積極的な教材化, 現実の社会問題を含みこんだテーマ性の強い作品群の積極的な教材化であり, のみならず, これが1980年から1992年の間に刊行された副読本8点の素材選択にも見てとれる EMC の特徴的な教材観であることを明らかにした。

本稿の目的は, 副読本前半部の単元群から, 単元4「小説冒頭部の映像化 (From Book to Screen)」をとりあげ, 活動の意義と, 学習者に求められる読みの具体を明らかにすることにある。小説における冒頭部の役割を意識する上でも, 見るという解釈行為に意識的に取り組む機会を得る上でも, 冒頭部の映像化はきわめて意義深い取り組みである。映像化が小説を深く読むためにどのように役立つのか, 実際の映画についてはどこをとりたてて読むことが意図されているのか。

単元4の構想を分析・検討し明らかにしたいと考えた。

研究の方法として、まず、単元4の発問にかかわって、小説「弟を地に埋めて」の教材性を明らかにする。具体的には、作品全編にかかわる題名の象徴性と間テクスト性にと着目する。次に、単元4の構想を分析・検討する。最後に、比べ読みのテキストとして選ばれたTV映画「スレッズ」(原題 *Threads* / 英 BBC 制作 / 1984年) (注6)の冒頭部の構成を、絵コンテにもとづいて考察し、見るという解釈行為を通して学習者にどのような読みが求められるのか、明らかにすることとする。

2. 小説「弟を地に埋めて」の教材性

精読テキストおよびワイダー・リーディングの起点として教材化された小説「弟を地に埋めて」の教材性を、以下、考察していく。

2.1. 作品の梗概

作品は序章「はじめに」と終章「おわりに」のあいだに39の章をはさみ、41の章から成る。

冒頭より一人称の語り手の回想録の体裁をとり、実際にこれが弟を葬った後に綴り終えた手記であることが、作品の結末部で明らかになる。

語り手は、現代イギリスの架空の町スキプリーに暮らすダニー少年14歳である。核ミサイル投下により突如として日常が奪われ、核戦争の只中で両親を失い、ダニーと弟のベンは「核の冬」を死の恐怖と戦いながら生きさまよう。文明社会の崩壊と人心の腐敗を目の当たりにしたダニーは絶望を覚えるが、少女キムとの出会いによって希望を取り戻す。極限下の状況にあって、彼ら三人は互いへの愛情で人間性を保つ。最終章では、むなしく訪れた弟ベンの死と、略奪の不安と緊張の中を生き続けるキムとダニーの現在と、次の出立時には手記を床下に隠すというダニーの決意が語られて、作品は終わる。

2.2. 賢者イブウエルの言葉の反復効果

題名の由縁にもなった、「弟を大地に葬りし者いずこにも」(He who places his brother in the land is everywhere.)の反復は、作品中に7回にわたってみられる。

読み手はまず表紙で題名「弟を地に埋めて」(brother in the land)を読み、次に見開きで「賢者イブウエルの言葉」との断り書きが添えられた古文書の一節「弟を大地に葬りし者いずこにも」を読む。

3・4回目はいずれも19章での反復で、唱えるのは老

人ブランウエルである。以降、両親を失ったダニーは老人ブランウエルの指揮する組織「マサダ」に身を寄せる。ブランウエルは長老として作品の思想に深くかわる言説を述べる、雄弁な語り部である。作品の語り手は一貫してダニー少年だが、ときにこのように賢者の立場からブランウエルの語りが入りこまれる。

5回目は32章での反復で、放射能障害に怯えパニックになるキムに、ダニーが不安なのは自分だけではないと、老人ブランウエルの言葉を思い出して語ってきかせる場面である。6回目は最終章で弟を葬る場面での反復であるがここでもブランウエルにならった言葉としてダニーが唱える。7回目が結末の一文「この手記はベンにささげる。大地に眠る弟のベンに。」(～, and it is for little Ben, my brother. In the land.)のなかにあらわされたという点をとらえると、作品のはじめからおわりまで「弟を地に埋めて」というフレーズが通奏低音のように一貫してあり、弟の死のイメージが作品の読みの枠組みをつくっていることが言える。

2.3. ひらかれた結末を演出する語り部の構造

「弟を大地に葬りし者いずこにも」の6回目の反復のあとに続く段落では、ダニー少年の「これまでの」物語がこの家で見つけた「ぶ厚いノート」に記された「手記」であることが告げられる。そして段落末の一文、「今、その記録も終わろうとしている」というダニー少年の言葉に、もうひとつの時間軸が明らかにされる。すなわち、「今」の言葉で、語り手の時間軸と回顧型で描かれてきた物語の時間軸が一致し、ここでひとつの物語が閉じ、もうひとつの物語がひらかれていく。

7回の反復を重ねたフレーズを最後の一文にして、最終段落の三文は「いよいよ、おわかれだ。この手記はベンにささげる。大地に眠る弟のベンに。」としめくられる。このひらかれた結末に対し、読み手はどのような展開を予想するだろうか。ひとつの可能性を次に探ってみよう。

2.4. 死の間に介在する希望と失望の往復

読み手は表紙の題名及び兄ダニーの腕のなかに抱きかかえられる弟ベンの絵の構図から、弟ベンに死のイメージを意識して作品を読み始める。以降、弟ベンのイメージ造型には死の影がともない、「弟を地に埋めて」のフレーズが反復されるたびに、読み手は迫りくる死の恐怖や不安を想起させられ、作品を読みすすめるのである。

一方で、死の間には希望と失望の反復という作品全体を貫くモチーフが見いだせる。

再び反復の実例を用いて説明したい。「弟を大地に

葬りし者いずこにも」の1・2回目の反復は核戦争勃発という絶望的な事象の伏線であるが、その次には少女キムとの出会いがある。母の死後の失意のなかでプランウェルが発する3・4回目のフレーズの後には父の死の悲しみに襲われるが、新しい居場所「マサダ」を発見し希望を見出す。

5回目の反復のあと、作品はクライマックスを迎える。スイス軍の来訪である。救助の期待を裏切り、スイス軍は村人の乏しい物資を強奪した。まさに希望と失望を一瞬にして読み手に味わわせる出来事である。この事件を機に作中における希望から失望への転換は加速度を増す。

主人公の深い失望はややもすると絶望に傾きながら、作品ラストの最大の事件である弟の死へ、6回目の反復へとつながっていく。しかし、「生きていく理由の半分」(39章)であった弟ペンの死を迎えたダニー少年は深い失望をもう一方の「生きていく理由の半分」である少女キムと生き延びることへの希望へと転換させる。そして、この転換によって、作品が救いのない物語で完結してしまうことが回避されている。

7回目の反復、すなわち最後のフレーズにいたって、読み手は、ひらかれた結末以降の物語を読みはじめる。そのとき、想起させられる弟の死のイメージは、作品の希望と失望の反復のモチーフをも想起させ、先の展開を予想する手がかりを読み手に与えるのではないだろうか。

2.5. 先行テキストのイメージの援用

エジプトの古文書より賢者イブウェルの言葉を引用して何度も反復してみせたように、小説「弟を地に埋めて」には、先行テキストのイメージを借りながら本編を成立させる手法がみとれる。こうした作品の間テキスト性を明らかにするため、この他に作中にどのようなテキスト群が引用されているのかを以下に列挙する。

A ことわざ

- ・「天からコインが降ってくる」(1章)
- ・「洞窟に住む竜がたてるような音」(1章)

B 詩

- ・キプリング『東と西のパラッド』(序章)
- ・コールリッジ『老水夫行』(3章)
- ・エリオット『空ろな人間』から「爆発音ではなく、すすり泣く声で」(36章)

C 歌詞

- ・『ハンマーをふるえ』米国の古い民謡(25章)
- ・「核戦争後の状況を歌った歌」(26章)

- ・『人食い怪獣パープル』ポップソング(32章)

D 絵画

- ・「画家のロウリーが描いた絵のような光景」(22章)

E 活字

- ・政府刊行パンフレット『生きのびるために』(2章)
- ・「ヒロシマについてどこかで読んだことがある」(3章)
- ・デフォー『ロビンソン・クルーソー』(16章)
- ・サリンジャー『ライ麦畑でつかまえて』(22章)
- ・「敵に捕らえられたスパイの物語」(29章)
- ・「何かで読んだのを思い出した」(29章)
- ・「スキプリー・タイムズ」作品中の新聞(29章)
- ・「読むものなんて何もない」(33章)
- ・「ヒロシマを書いた本は読んだことあるの?」(34章)

F 映像

- ・「ボンベイの映画を見たことがある」映画(3章)
- ・「クリント・イーストウッドなんかみたい」(5章)
- ・「古い喜劇映画の警官と泥棒みたいに」(7章)
- ・「連合軍がパリに進軍したときの映画」(11章)
- ・「テレビで見る人殺しや破壊のニュース」(23章)
- ・「戦争映画に出てくる捕虜収容所の監視塔みたいだった」(24章)
- ・「ふと、昔見た映画を思い出した。訳が分からないふりをしたおかげで、国に送り返された捕虜の話だ」(29章)
- ・「映画の捕虜収容所みたい」(29章)
- ・「まるで戦争映画の一場面みたい」(32章)

表現の中心は、映画、小説、詩、歌詞といったテキストからの引用もしくはそれらにまつわる関連事項にある。映画、小説、詩、歌詞という表現形態は、副読本後半のワイダー・リーディングの学びで出会うテキスト群のそれと対応している。

一覧から、本作と他のテキストとの関連性は、そのほとんどが間接的引用にあることがわかる。映画が他のテキストに用いられる場合をみると、そこには戦争を写實的に表現する手段としての映画の利用がみとれる。「映画の捕虜収容所みたい」「まるで戦争映画の一場面みたい」と、比喩の一部として、特に戦争映画は引用されている。

希少ではあるが、「天からコインがふってくる」「洞窟に住む竜がたてるような音」といったことわざや「核戦争後の状況を歌った歌」は直接的引用に分類できる。作品の見開きにある、エジプトの古文書からの引用の言葉「弟を大地に葬りし者いずこにも」と作品全体の関係も、こうした間テキスト性の直接的引用の一例である。

これら先行テキストは読み手の社会的文化的背景に

かかわるものである。そして、こうした先行テキストのイメージを借りながら本編を成立させる手法が、作品を息づかせていると指摘できる。

2.6. 小説「弟を地に埋めて」の教材性

小説「弟を地に埋めて」の教材性についてまとめた。学習者と同年代の男子の主人公が生き残りをかけて活躍する作品であること、一人称の語りで貫かれていること、小説としての自律性をそなえ、ひらかれた結末において豊かな読みの可能性を読み手に与えていること。こうした要素を取りあげるだけでも、作品が読書に苦手意識をもつ男子生徒にとっても与しやすい要素を満たしていることが言える。核戦争が身近な脅威として日常にあった1980年代の世界的危機状況を背景に、こうした核戦争後の世界を描いた児童文学が生まれてくることはごく自然なことであったと考えられる。一方、長谷川（1984）が指摘するように、この当時我が国にあって児童文学の世界では「現在の、そして未来の核について想像力を働かすことはまれ」だという状態にあった。小説「弟を地に埋めて」のひらかれた結末が学習者に発するのは、あなたはこのような世でどのように生きていくかという究極の問いである。そして、その答えを導くプロセスのなかにこそ「私」の言葉による世界の構築が意図されているのである。

3. 単元4「小説冒頭部の映像化」の考察

3.1. 構成上の位置づけと特徴

副読本前半の12単元は、小説「弟を地に埋めて」の基本的精読法をとりあげた単元群である。12単元は、小説を読む前の活動〔単元1～3〕、小説を読み進める中で取り組む活動〔単元4～9〕、小説を読んだ後の活動〔単元10～12〕と三段階の構成をもつ。小説を読む前の活動〔単元1～3〕は小説読解の導入段階であり、これ以降の単元に、基礎〔単元4～6〕、応用〔単元7～9〕、発展〔単元10～12〕と四段階の構成をみてとることができる。

小説を読む前の活動であり、読解の導入段階にあたる単元1～3を概観しておく。単元1「1945年8月6日(6th August 1945)」は、「原爆の父」と呼ばれたロバート・オッペンハイマーの科学者としての後悔と反省の言葉に続き、記録文の体裁で原爆の威力と投下後の広島惨状を具体的な数値で伝える。続く単元2「原子爆弾が語る (From a Bomb)」では擬人化された原子爆弾が「もしも私 (I) がロンドンに投下されたら…」と学習者 (you) に原子爆弾の威力と放射能汚染について説明し、単元3「規則 (rules)」は学校や家庭、国、

人の世 (moral) の秩序を正常に保つための「規則」が、核戦争によって壊滅状態に陥り、生存者がほんのわずかになった「社会」で果たしてどれだけ有効で、実際に必要になる「規則」は何なのかを考えさせる班活動を組織する。

単元4「小説冒頭部の映像化」は、単元1から単元3で小説の基本的背景を知る資料読みおよび活動を経た後に、いよいよ小説の本格的な読みの活動に入る単元にあたる。

副読本のワイダー・リーディングへの取り組みの特徴のひとつに、読みの対象を多様なメディア・テキストに求める点があるが、このように、小説の読解に入る最初の単元から学習者に活字テキストの映像化および活字テキストと動画テキストの比べ読みを求めるところにこの基本的特徴が如実に表れているといえよう。

3.2. 単元4前半の発問の考察

次に、単元4前半部の発問を考察していく。

前半部は小説の序章と1・2章の計3章分を読んでから取り組む課題である。全世界的な出来事と個人的な出来事の描写をリストアップした中から、学習者には発問(1)「小説の冒頭部を10のカットで映像化するとしたら、どれを選ぶか」、発問(2)「全世界的な出来事と個人的な出来事のバランスをどのようにとるか」、発問(3)「両者の出来事のいくつかが同時進行で起こっているように表現するためにはどうしたよいか」と三つの問いが発される。

映像独特の表現技巧として、二つの異なる事象を同時に差し替えながら、それぞれの事象が同時に進行する様を巧みに演出することができる、カット割りを用いた技巧がある。発問(2)は映像表現ならではの技巧と表現効果に着目を促す問いで、単元4後半のTV映画「スレヅ」を見る際の着眼点としても取り立てられる。

映像表現の特異性を強調する一方で、小説を読むために最低限ふまえておくべき読みの観点はしっかりと発問のなかでおさえられている。とりわけ、冒頭部でどのような「出来事」が誰によってどのように語られたのかに焦点をあて、語りの構造への着目を促す。小説「弟を地に埋めて」はダニー少年の一人称語りの形式をもつ。とりわけこの語りの形式は、語り手がある地点から過去を振り返って語る回顧型の語りの形式である。映像化することによって「同時進行」の物語をつくるようにという発問(3)は、学習者が小説を「進行」中の物語に変化させる意識的な取り組みの中で、小説「弟を地に埋めて」本来の語りの特徴に気づくこ

とをねらったものと考えられる。

全世界的な出来事と個人的な出来事の描写は次のようにリストアップされている。

全世界的な出来事

- ①地の底にあるミサイル
- ②空のかなたにあるミサイル
- ③深い海の中にあるミサイル
- ④東から西のあいだをゆくミサイル
- ⑤鳴り響くサイレン
- ⑥パニック
- ⑦緊急司令部に避難する政府要人
- ⑧シェルターに避難する市民
- ⑨ミサイルが引き起こす破壊
- ⑩ぼんやりと廃墟にたたずむ市民

スキプリーで暮らすダニー少年の出来事

- ①スキプリーのある暑い夏の日
- ②ダニーは弟の子守を頼まれる
- ③芝生の上でうたたねする
- ④「嵐」で目が覚める
- ⑤コンクリートのトーチカを見つける
- ⑥閃光と突風
- ⑦スキプリーの町をキノコ雲がおおう
- ⑧ダニーは本や新聞やテレビで見たことを想起する
- ⑨ダニーはトーチカの隅でまるくなる

いずれも小説のなかで起こる「出来事」の要点だが、作中人物の誰かの視点を介したわけでもなく、きわめて客観的に並べられている。これは語りの様式を変えることによって一人称、三人称の語りの形式の差異がもたらす作品の表現効果を意識させるねらいにもとづく。全世界的な出来事は全知の視点から、スキプリーの町とダニー少年の個人的な体験はダニーの視点から語られるように語りの変化をもたらすことも映画では可能である。

3.3. 小説の冒頭部（序章と1・2章）の構成

単元4の発問(1)は序章と1・2章の二者間で語られる内容の違いに着目を促し、二者の組み立ての演出手法を問う。

序章は詩人キプリングの詩「東と西のバラッド」の冒頭からの引用「東の人間と西の人間はわかりあえない」ではじまる。その後が続くのは、大国が東の国と西の国の二派に分かれて第三次世界大戦を勃発させていく背景である。それぞれが敵国に向けてミサイルを発射し、核弾頭が目的都市に達した瞬間、平和な市民

生活は簡単に崩壊し、生き延びた人々は放射能の恐怖にさらされて生きる運命と直面する。

序章の最後に登場する主人公ダニー少年の語りによって、第1章はスキプリーの町の平和な一日の描写から始まる。核ミサイル投下前の町の光景と、ダニー少年の日常風景は、核ミサイルの投下によって破壊される。第2章はダニーがキノコ雲を見る場面から始まる。そして、全世界的出来事がはじめて個人レベルでの具体的体験に結びつくのである。

学習者は、核ミサイル投下前の日常の風景と、投下の瞬間、投下後の一変した惨状との間の、歴然とした差を際立たせるよう、三つの事象それぞれに演出をほどこす。視聴者に、日々の暮らしを脅かす不穏な雰囲気、この先に起こる事件の予兆を感じさせる危機感や恐怖といった感情を味わわせるような演出である。

3.4. TV映画「スレッズ」との比べ読みの観点

単元4前半の発問(1)～(3)において学習者が着目を促されるのは全世界的な出来事と、主人公であり語り手であるダニー少年の個人的な経験の組み合わせである。

この着眼点はTV映画「スレッズ」の冒頭を用いた学習活動をふまえて設定されている。というのも、次に学習者にはTV映画「スレッズ」の制作者の手法の中でも、異なる二事象の混成の手法への着目が促されるからだ。学習者はこの手法をふまえた上で、単元4の中心である、小説冒頭部の映像化に取り組むのである。

TV映画「スレッズ」の冒頭にも異なる二事象を組み合わせた構造がみられる。こちらの場合、核戦争の全世界的出来事の対にくるのは「地域的出来事」である。ここでは実在するイギリス中部の産業都市、シェフィールドである。

3.5. 単元4後半の発問の考察

続く単元4後半部の発問(4)は、全世界的な出来事および個人的な出来事から10のカットを選び、資料1「映像化の企画メモ」にならって表を作成するよう促すところからはじまる。そして、そのための作業として

資料1 映像化の企画メモ

出来事	画像 音楽	効果 ねらい	理由
1 スキプリーの暑い夏の日	晴れた夏の日の町。ロングショット。鳥の歌声。	穏やかでリラックスした、くだけた雰囲気をつくりだす。	このカットで事件の主たる舞台設定ができる。
2 海の底にあるミサイル	ミサイルのカット。ぼんやりとしている。やや長め。低い、恐怖感を与える音楽。	危機感をつくりだす。	このカットは緊張感をつくりだし、前のカットとは対照的なものになる。

TV映画「スレッズ」の冒頭部で「地域的出来事と全世界的出来事とがどのように融合されているか」を明らかにしよう求める。

TV映画「スレッズ」の冒頭部を視聴すると、なぜここで10のカットを選ぶよう指示されるのか、その意味がおのずと分かる。というのも、映画の冒頭はまさに10カットで構成されているからだ。

たとえばそれは資料1「映像化の企画メモ」のモデルの2カットにも如実だ。カット1の「出来事」は「スキプリーの暑い夏の日」で2は「地の底にあるミサイル」があるが、日常の後に非日常の映像を写すカットの組み合わせは、TV映画「スレッズ」が採用した映像の手法の通りである。カット2の「音楽」は「やや長め。低い、恐怖感を与える音楽」とあり、後述するTV映画「スレッズ」のチューバの短調の調べと通ずる。なお、カット1の「画像」には「晴れた夏の日」、音楽には「鳥の歌声」とあるが、TV映画「スレッズ」の冒頭部の導入のあとに続くカットは、春の日の、鳥の囀りが聞こえる丘が舞台であり、ここでもTV映画「スレッズ」の日常を描いたカットが援用されていると分かる。

すなわちTV映画「スレッズ」の冒頭部をモデルにすれば、学習者の映像化への取り組みの負担は軽減する。その意味で、単元4の表現活動の設定には、学習者の取り組みやすいよう条件付き創作活動を設定した編集者側の配慮がうかがえる。

次の章では、先に述べたように語りの構造を意識して、TV映画「スレッズ」冒頭部を考察する。そして、どの点がいかにされて小説「弟を地に埋めて」の映像化のための比べ読みテキストとして取り入れられたのかを明らかにすることとする。

4. TV映画「スレッズ」の冒頭分析

単元4には、プロの作品であるTV映画「スレッズ」の冒頭部を構成する10カットを見て、学習者の表現学習にいかすよう促す発問がある。

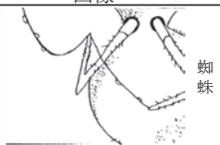
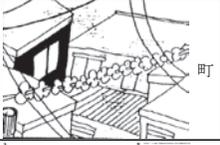
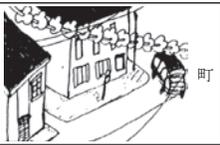
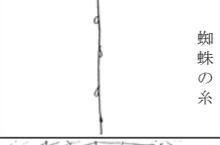
資料2「TV映画『スレッズ』の冒頭分析」に、冒頭部10カットを、画像・音声・文字情報にわけて分析して示した。

以下、資料2をもとに、見るテキストとして取り上げられたTV映画「スレッズ」の冒頭部を分析し、10カットをとりあげる意図を考察する。

4.1. 冒頭部の構造分析

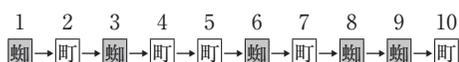
画面にタイトルが出るまでを冒頭部とすると、TV映画「スレッズ」の冒頭部は10カットからなる。カッ

資料2 TV映画「スレッズ」の冒頭分析

カット	画像	秒数	【音声】【文字】
1		00	[BGM] チューバ短調の調べ
		07	[語り/男声] In an urban society, 都市を構成する社会では、
2		09	[BGM] チューバ短調の調べ
			[語り/男声] everything connects. すべてが結合している。
3		11	[BGM] チューバ短調の調べ
			[語り/男声] Each person's needs are fed by the skills ひとりひとりの需要物は、 多数の他者の技術によって 供給される。
4		14	[BGM] チューバ短調の調べ
			[語り/男声] of many others.
5		17	[BGM] チューバ短調の調べ
			[語り/男声] Our lives are woven together in a fabric, 私たちの生活はひとつの機 構の中に組み込まれて成り 立っているのだ
6		20	[BGM] チューバ短調の調べ
			[語り/男声] but the connections that make society strong が、その結合の強い社会は
7		23	[BGM] チューバ短調の調べ
			[語り/男声] also make it vulnerable. また脆いものである。
8		27	[BGM] チューバ短調の調べ
9		30	[BGM] チューバ短調の調べ
10		34	[BGM] チューバ短調の調べ
		39	【題名】 THREADS
		43	【脚本】 by Barry Hines
		48	【舞台(場)】 Sheffield (シェフィールド)
		50	【舞台(時)】 Saturday March 5th (3月5日 土曜日)
		53	[BGM] 戦闘機の飛来音
		55	[BGM] ラジオのpop音楽

トの構成の特徴は、異なる二事象の五つずつのカットの組み合わせから成るところにある。二事象の一方は、1匹の蜘蛛が意図を紡ぎ、1枚の巣を作り上げるまでの、極めて短い物語である。その物語に挟み込まれる形で、映画の舞台となるシェフィールドの4カットが挿入されるが、10カット目はこの町の全体になる。

蜘蛛のカット群（カット1,3,6,8,9）を「蜘蛛」、シェフィールドの町のカット群（カット2,4,5,7,10）を「町」と表して、資料2の10カットの組み立てを簡略に図式化すると次のようになる。



カット1と2およびカット3と4は、同型の対構造の反復である。続くカット5と6および7と8の関係は、前半とは逆向きの対構造の反復であり、結末の対構造9と10は、冒頭と同型の対構造の反復である。すなわち、冒頭の対構造の反復のなかに逆向きの対構造の反復を挟み込むことによって、同型の対構造の5度にわたる反復が回避されていることが分かる。これらは、二つの事象が一つの共通項でくられていく統合のプロセスを、より効果的に表現するための手法ととらえられよう。見る者にこのプロセスと結果を伝えるのに、二つの画像の単調な入れ替え操作では説得力に欠ける。したがって、冒頭部の画像構成におけるリズムの変化は、その冗長さを回避するために制作者がしかけた演出とみなすことができる。

加えて、冒頭カット1と2、すなわち対構造の要素「蜘蛛」と「町」の間には、抽象から具体へという変化の関係がある。この変化は、冒頭カット1と結末カット10の対比においても同様に見られる。つまり、抽象的事項から具体的事項へという変化は、10カット全体の流れを貫く大きな枠組みになる。カット1と2のつながりを見る者に二つの画像が対比の関係にあることを意識させる。この対比関係は、冒頭部の構成における制作者の最大のしかけである。見る者は「蜘蛛」の抽象的事項と「町」の具体的事項のかかわりを考える。こうした思考のプロセスを経てカット10にいたるとき、「蜘蛛」が「町」の何の比喩であるのかを理解することができるのだ。

4.2. 冒頭部の内容分析

以下、冒頭部の内容にかかわって、画像と音声とを分析する。

(1) 蜘蛛のカット群の物語

冒頭部は蜘蛛が糸を紡ぎ一枚の巣をつくりあげるまでの物語が基調にあり、その間にシェフィールドの町

のカットが挿入されるという趣きがある。

カット1は一匹の蜘蛛が間断なくしかも速いスピードで糸を紡ぎ出す様子を映し出す。科学映画さながらに糸を生産する営みが克明かつ詳細に映し出される。このときのカメラの焦点は、糸の出口にあたる蜘蛛の腹部と紡ぎ出される糸にある。実物よりもかなり大きくクローズアップされているために蜘蛛の腹部はグロテスクな雰囲気醸し出す。カット3は蜘蛛の全体像を写し、カット6のカメラは背後から蜘蛛の姿をとらえる。カット1は糸に、カット3は糸と蜘蛛に、そしてカット6は蜘蛛にとカメラの焦点が移動する。続く連続カット9および10は、糸、蜘蛛の巣を写す。

どのカットにも共通するのは糸の映像である。蜘蛛のクローズアップを写したカット6でも蜘蛛は糸の生産媒体として映し出されていることが音声情報から分かる。すなわち、ここでも表現内容の主体はあくまでも糸なのだ。

蜘蛛の糸は作品のタイトル「スレッズ (Threads)」を意味する。蜘蛛の糸の物語を見る者は、タイトルの象徴性を冒頭部の構成と内容のなかに読んでいくのである。

(2) 画像情報と音声情報（ナレーション）の関わり

ここで冒頭部のナレーションの内容とカット1, 3, 6の画像情報との関わりとをみておきたい。画像に音声が入るタイミングを次に示す。

都市を構成する社会では（カット1）、すべてが結合している。ひとりひとりの需要物は、多数の他者の技術によって供給される（カット3）。私たちの生活は、ひとつの機構の中に組み込まれて成り立っているのだが、その結合の強い社会は（カット6）また、脆いものでもある。

まず、カット1と、そこにあわせて流れるナレーションの内容（「都市を構成する社会では…」）にはこの時点で共通項を見出すことは難しい。けれども、音声情報の量が増えることもあって、カット3では画像情報と音声情報のあいだに共通項を見出すことが比較的容易になる。音声情報に含まれる「技術」や「供給」の言葉はカット3の画像内容と無理なく結び付く。言い換えると、糸の生産活動に邁進する蜘蛛の画像を見るときに想起される言葉として、「技術」や「供給」の言葉は似つかわしい。

カット3の音声情報は、個と全体、需要と供給という二つの二項対立を含む。前者についてはその前文との連なりのなかで、社会が内包する多数の個人、個人の集合体によって形成されるひとつの社会というよう

に、個人と社会の関係を双方向からとらえることができる。後者は、近代資本主義経済社会を成り立たせる基本の仕組みであり、需要と供給のバランスは経済社会が健全に機能しているか否かを測る指標になる。

カット6のクローズアップは小動物の蜘蛛をまるで巨大な怪獣のように誇張する。そして、ナレーションの「強い社会」の言葉は、精力的に活動が続ける蜘蛛の画像の語るところと呼応する。カット1でも蜘蛛の画像に重ねてナレーションに「社会」という言葉が用いられる。カット6でも同じ組み合わせが反復されることによって、見る者はこれら6カットを通して用いられる「蜘蛛の生産能力＝発達した産業構造」の比喩の枠組みを確認するのだ。

(3) 言葉と映像のレトリック

ナレーションはカット1から7まで続く。ナレーションが消えた後のカット8と9は、一本の糸が連なって巣を形成するまでの、部分が全体へと結合されるプロセスを表す。すなわち、カット8と9は、カット7までのナレーションの内容を目で確認させ、蜘蛛のカット群とシェフィールドの町のカット群が、ともに、部分と全体の結び付きにこだわった構図を内包することを意識させるのである。

カット9の蜘蛛の巣の画像がフェードアウトしたところに、カット10のシェフィールドの町の画像上に現れる。消え入る蜘蛛の巣の向こうに町の全体像が立ち現れてくるかのように見せるフェードアウトの手法を用いてカット9と10の画像の間の切れ目を回避し、両者共通の基調である結合体というモチーフを見る者に強く意識させる効果が、ここに認められる。

すなわち、カット9の蜘蛛の巣、すなわち糸の結合体は、カット10で、産業構造を持つ都市社会の比喩表現であることが明らかとなる。このときが画像上の町は、一本の細い糸から成る巣が内包する結合体としての脆さも、同様にはらむことになる。

冒頭部で画像と音声を通して見る者に印象付けられるのは結合体ゆえの脆さという逆転の論理である。映画は、原子爆弾投下前と投下後のシェフィールドの市民の暮らしを、ある二家族の生活の変化に焦点をあてて描くが、平穏な日常を保障する基盤は原子爆弾の投下によって一瞬のうちに崩壊する。画像に配分する時間の操作で、その一瞬と、それまでの歴史の残酷な対比が効果的に描かれる。

(4) 冒頭部の音声情報 (BGM および効果音)

冒頭部には三種類の音の効果が関わる。

まずカット1では腹部から糸を紡ぎ出す蜘蛛の画像とともに、チューバが奏でる低音の音楽が挿入される。ソロの演奏により一音ずつ下がっていく短調の調べは

単調であるが極めて暗い雰囲気演出する。10カットのなかでこの低音の調べは単音から複音になり、一度もしくは二度ずつ下がっていく単調な音の操作に、二度以上の隔たりや、下げるだけでなく音階を上げていくなどの変化が加わる

チューバの音はカット9でデクレシェンドし、カット10で画像上にタイトルのキャプション (THREADS) が出ると同時にクレシェンドする。続いて場 (Sheffield) と時 (Saturday March 5th) に関わる情報がキャプションに表され、そしてこれらの文字が画像から消えると同時に、カット1から続いた管楽器の奏でる低音の調べも消え、代わって耳うるさいジェット機の飛来音が挿入される。

約2秒間のジェット機の音が続くと、これにかぶさるようにして、アメリカン・ポップ音楽 Johnny Be Good が流れ出し、音量が大きくなるにつれてジェット機の音は次第に小さくなる。やがてジェット機の音が消え行ったところで画像は次のカットへと切り替わる。見晴らしのよい小高い丘の上に止まった一台の車を背後から撮った映像であり、車中に写る人物の影から Johnny Be Good がカー・ステレオから聞こえるBGMであることが分かる。ポップ音楽の明るい調子が平和でのどかな雰囲気を演出するカットである。

Johnny Be Good と冒頭部のチューバの短調の調べは実に対称的である。ここに見られる明暗の二項対立は、画面を見る者に、平和と戦争、日常と非日常といった対比を思わせる。また、そこに挟み込まれるジェット機の音にはメロディーも曲調もなく、ただ強弱、大小といった性質のみをもつ音として存在する。日常の風景を写す画面に、突如として挿入されるジェット機の飛来音は見る者に居心地の悪さを与える。否が応でも聞かされる大音量が醸し出す圧迫感は、平穏な日常生活を乱す侵入者の登場を象徴的に表すものである。

4.3. まとめ：見るという解釈への視座

冒頭部10カットの構成には、蜘蛛とシェフィールドの町の二つの物語のプロットを読むことができる。町の物語を意識して見ると、産業都市としてのシェフィールドという町の性格が意図的に切り取られた5カットから構築された舞台の性格であることを読みとることができた。

ここから明らかなことは、映像を見ることによって学ばれるべき点が、小説の読みの観点と同じであることだ。冒頭部への着目、舞台設定、プロット、先の展開を予想すること、すなわち、物語の構造を明らかにするための、基本となる分析の観点に着目するとき、小説と映画は同じ平面において論じることができる。

小説の精読に取り組む最初の単元において、学習者を見る解釈行為へと誘う点は、単元4の特色であり、副読本の編集の基本姿勢を如実に反映した点でもある。

5. 結語

小説における冒頭部の役割をあらたに意識する上でも、見るという解釈行為に意識的に取り組む上でも、冒頭部の映像化はきわめて意義深い取り組みである。ゆえに活動の困難度が増す点が危惧されるが、比較的画像の構成が読みとりやすく、しかも同じテーマを用いた同時代のTV映画をモデルにし、それに倣って活動を進めることができるような配慮のゆきとどいた編集がおこなわれ、そうした不安を払拭している。

活字テキストも映像テキストも、それぞれのメディアの特性をもつ。しかし、どちらも語り手をもった物語であるという視座に立って分析を試みるとき、読みの観点として立ち上がってくるのは、登場人物、出来事、プロット、舞台設定、語りの構造といった、共通する要素である。活字テキストと映像テキストの間で共通する読みの観点と読みの方法に着目した双方のメディアの教材化には、どの作品を用いてもどの学習者にも最低限身につけておくべき読みの方法は保証するというイギリスの長い文学教育の歴史のなかで培われてきた文学教育観の反映を感じさせる。

最後に副読本の教材性について述べておきたい。副読本「核戦争を扱った小説作品のよみ」は核戦争をテーマとした文学、映画、音楽、ノンフィクションテキストを、小説「弟を地に埋めて」を起点として読み上げ、読み深めていくワイド・リーディングの提案である。核開発は経済的社会的文化的に影響を持つテーマであり、批判的に読むためのテキストには政府刊行物をも取り上げる。多様なテキスト、多様な言説に出会わせ、最終的には自分の言葉で自分の考えを統合し、「私」はどのように社会参画するのかを学習者に表現させることが、副読本が提案する学習指導としてのワイド・リーディングの目指すところなのである。

このことをふまえて、我が国の中等国語教室におけるワイド・リーディングの可能性と課題について考えるとき、社会に偏在する多様な言説の、何を、どのように教材として取り上げるべきかを問うことには意味がある。それは、学習者が世界を象る言葉を獲得する場として国語教室がどう機能すべきかという古くて新しい課題に直結する問いに他ならないからだ。

【注】

- 1 The English and Media Centre (中等国語科教育センター) は、1975年、Inner London Education Authority (内ロンドン教育局) から The LEA English Centre (ロンドン教育局国語センター) として設立された。2017年現在、独立した教育機関として運営され、中等および高等教育課程の国語とメディアに取り組む教師向けセミナーの開講、授業用テキストの編集発行、詩創作と批評のコンテンツといった学習者のための企画主催を通して、センターの活動はイギリス国内外で評価を得ている。
- 2 副読本 After the Bomb : Brother in the Land and Wider Reading (「核戦争を扱った小説作品のよみ」) は Times Educational Supplement (タイムズ教育版, TES) より1991年度 TES School Book Award (優秀教科書賞) を受賞している。
- 3 筆者 Robert Swindells (1939-) は When Darkness Comes で1975年度アメリカ子ども学習協会児童図書賞を受賞し、The Moonpath and Other Stories で1980年度ナショナルブック賞児童書部門にノミネートされる。彼の代表作となる本書は、1985年度チルドレンズ・ブック賞を受賞し、カーネギー賞の推薦作となる。なお、本稿では次の原書と以下の邦訳を用いる。Robert Swindells (1984) Brother in the Land, Oxford University Press. 齊藤健一訳 (1988) 『弟を地に埋めて』福武書店。
- 4 拙稿 (2016) では1985年に発表された「義務教育修了資格公試験制度国語科全国評価基準」の文学の評価項目を検討し、イギリスにおけるワイド・リーディングが、精読と表裏一体となり、読みの教育を培う位置づけにあることを示した。なお、本稿では、副読本の編集方針およびイギリスの国語教室において想定される読みの拡がりや深まりを限定的にとらえてしまわぬよう wider reading にあえて「幅広い読書」の訳語をあてず片仮名表記の「ワイド・リーディング」を用いることとする。
- 5 「作為的に加工された読本ではなく」、「1冊の絵本や絵読み物、児童文学として自律した児童図書そのもの」(松山, 2015. pp.179) をさす。
- 6 核戦争の勃発から13年後までの世界を描くドキュメンタリー仕立てのテレビドラマ番組。イギリスBBC制作。112分。イギリスでは1984年9月23日にBBC2で、我が国では同年8月9日にテレビ東京で放映された。本稿の分析にはBBC Enterprises(1985) VHS資料を用いた。

【参考引用文献】

- 安藤美紀夫 (1984) 「戦争・核・子ども:私に寄せて (特集:核時代と戦争児童文学)」日本児童文学者協会『日本児童文学』30(8), 6-13.
- 石上正夫・時田功編著 (1980) 『戦争児童文学350選』あゆみ出版
- 長谷川潮 (1984) 「軍神と犠牲者のあいだ:国家の戦争像と個人の戦争像(特集:核時代と戦争児童文学)」日本児童文学者協会『日本児童文学』30(8), 14-21.
- 長谷川潮・きどのりこ編著 (1997) 『世界の子どもの本から「核と戦争」がみえる』梨の木舎
- 羽田潤 (2012) 「イギリス国語科教育におけるメディア・リテラシー教育の研究:マルチモーダル・テキストの活用を中心に」広島大学大学院博士論文
- 松岡礼子 (1999) 「イギリス前期中等教育におけるワイダー・リーディングの基礎研究:副読本『核戦争を扱った小説作品のよみ』をもとに」大阪教育大学国語教育研究室『国語教育学研究誌』第20号, 115-134.
- 松岡礼子 (2016) 「小説を読む力をどのように育むか:イギリス GCSE『文学』における評価項目の検討」大阪教育大学国語教育学会『国語と教育』第42号, 34-49.
- 松山雅子 (2013) 「イギリス初等教育における英語(国語)科教育改革の史的展開:ナショナル・カリキュラム制定への諸状況の素描」溪水社
- 松山雅子 (2015) 「イギリス初等教育における国語科教育改革の研究:Centre for Language/Literacy in Primary Educationの取り組みを中心に」溪水社
- 山元隆春 (2014) 『読者反応を核とした「読解力」育成の足場づくり』溪水社
- DES (1975) *A language for life : report of the Committee of Inquiry appointed by the Secretary of State for Education and Science under the Chairmanship of Sir Alan Bullock*, (通称 *Bullock Report*), London: H.M.S.O.
- DES (1985) *GCSE : The National Criteria*, HMSO

(主任指導教員 山元隆春)